

【伊予野村緒方氏系図】

良臣

豊後介 左大史 従五位下

貞観四年壬午三月己巳朔、改賜姓大神朝臣。

寛平四年壬子三月、再任豊後介而任既満当去

其国百姓情慕請 留其子麻幾 良臣許之。

庶足

左大史 従五位下

佐伯院の成立

佐伯の地名起源として蝦夷浮囚佐伯部の居住地説がある。移住して来た年代については定かではないが、大同元年（八〇六）近江の浮囚六四〇人が大宰府管内（九州）に移管された記録がある。これらの浮囚は海賊対策として軍事要地へ配置されたが、当時海部郡穂門郷の内であった佐伯がその候補地の一つであったとしても不思議ではない。軍港としての地理的条件は今も昔も変わらなからである。

かりに佐伯への浮囚の配置が大同元年だったとすると、佐伯院の成立も同時期と考えられ、佐伯古社である五所明神社が大同元年、大宮八幡社が大同二年の創祀と伝わるのも頷ける気がする。

九世紀の日本は各地で郡党が蜂起し、治安のために配置した浮囚もかえって反乱を助長する結果となり、山陽・南海の諸国では海賊が横行していた。朝廷ではその都度、追捕使や警固使を派遣して対処していたが、十世紀に入ると宮中を震撼させるような承平・天慶の乱が起っている。

庶幾

豊後国住入田郷 大野郡擬大領 外従五位下  
寛平四年壬子五月、補大野郡領、任外従五位下。  
号入田大夫、又号塩田大夫。

諸任

大野郡擬大領 外正六位上 初号大弥太  
延喜十二年壬申八月、補郡司、居緒方郷。

永藤

大野郡主生 外従七位下

幾藤

大三

惟藤

大野郡大領 従五位下 号大太  
長徳二年丁酉正月、太宰権師正三位伊周到着干。  
同年四月伊周蒙る恩免、帰洛之後、伊周有所感。  
以在国野生之女兒鞠育於、惟藤為之男惟任妻。

公藤

大次

天慶の乱と佐伯是基

承平年間、坂東では平将門が兵乱を起こし、西海では藤原純友が海賊を率いて朝廷に反旗をひるがえした。  
承平六年六月（九三六）

南海の賊徒の首、藤原純友、党を結んで伊予国日振島に屯聚し、千余艘を設けて官物私財を抄却（かすめとる）す。『日本紀略』

朝廷は紀淑人を伊予守に任じ、首領である純友にあえて「海賊追捕の宣旨」を与えた。帰降した賊徒には衣食や田畑を与えて農業を勧める等の対応をしている。しかし天慶二年（九三九）から再び活動を開始した純友に従五位の位階を与えて懐柔しようとしたが失敗した。

天慶三年、伊予・讃岐の国軍が敗れ国府は焼亡、備前・備中の兵船百余艘焼亡。続いて純友は近江の兵士を徴発して阿波を討った。朝廷は小野好古らを追捕山陽南海凶賊使に任命したが、太宰府の追捕使相安の兵が敗れ、周防の鑄銭使が焼き討ちされ、翌年ついに太宰府が虜掠された。

朝廷は平将門の乱を鎮定した征東大將軍藤原忠文を征西大將軍として太宰府にある純友討伐に向けた。

惟任

大野郡少領 号大太

惟基

大野郡大領 号砥大弥太是也

母 師内大臣正二位藤原伊周女

萬寿元年庚子六月朔日生、住緒方郷。

元永元年戊戌十一月十日卒、寿九十五。

惟次

大次郎 母同右



天慶四年（九四一）五月、太宰府にあった純友は博多津の合戦で追討軍に敗れ、伊予に逃げ帰ったところを警固使橘遠保に討ち取られている。その後も南海の掃討戦は続いた。

八月一七、八兩日、賊徒が日向国に襲来して合戦した  
が官軍有利に凶賊を討殺する中に藤原純友の次将  
佐伯是基を生け獲った。

九月一三日、豊後国海部郡佐伯院に賊徒が襲来し、追  
討凶賊使権少弐源朝臣経基は申時から西時（午後  
四時から六時）まで合戦して桑原生行を生け獲り、  
馬船絹綿・戒具・雑物を分取った。

十一月二九日、佐伯是基と斬獲された桑原生行の首は  
太宰府から京都の左衛門府に送られ、検非違使に  
よって左獄所に下された。『本朝世紀』

これによって東西の兵革は平定され天下に大赦が行わ  
れたというが、佐伯是基のその後の消息は不明である。

国内で浮囚の反乱が相続いた時代であったが、佐伯是  
基は佐伯院に配置された佐伯部であろうか、海上防備の  
役割が変じて海賊となり、無防備になった佐伯を拠点に  
純友の次将と称して沿岸各地を荒らし回っていたのであ  
ろう。

【堅田大神氏系図】（西米良系）

○大神氏 佐伯

○氏神 祖母岳大明神

○幕紋左巴 入田河穴巴云々

又松扇 竹丸

○幕紋出事 祖子三布掛、則表天人地三才

惣領五布掛、則表五智如来

○幕繩之事 惣領左繩、鹿子右繩云々

青白黒三色打交也

一、佐伯氏重代之太刀 カキビシ瀬上り之太刀、手鋒タ  
ヲシカキビシ申八万寿寺ノ池ヨリ網ニテ引揚タル太  
刀也。但シ、此池ニ光物出ケルヲ引上ケタレバ此太  
刀也。

一、瀬上ノ太刀トハ在京ノ時、船ヨリヲトシ玉フ時、此  
太刀瀬ニノボリケルヲトリ玉フ故ニ瀬上リト云也。



大神惟基生誕の謎

天慶の乱が起つたのは、大野郡大領として豊後に土着した大神庶幾（こねちか）の子諸任（こねちか）の時代である。この諸任を惟基とする説があり、佐伯是基を大神惟基と同一人物であるとする説もある。しかし三者を結びつける具体的な資料は何も残されていない。

惟基の生年についても諸説あって定かではないが、古い縁起を尊ぶような作爲が働いたとすれば新しい年代ほど信憑性が高いと言えるだろう。たとえば、伊予野村の緒方氏

一、大ヒヤウブ、小ヒヤウブト云ハ長刀也。



此松扇ハヒノ木ヲ以テ作タル扇也。是ハ唯見タル所也。又開タル所ヲモ出也。

(前欠)

○師大納言經輔公九州九ヶ国、為国司、御下向之時、大太惟基為養子、故經輔者養父也。厥後即取聿。根源者九州大名参会而有大狩、經輔秘藏五臟大馬、以外為食人、依無乘者。無念被思鳥処、惟基令推参、与此馬。眼指寄、暫睨彼馬所、自通身流汗。其後散々乗後廉射。悦之餘、大納言經輔取聿、厥後讓豊後国司云々。

系図には諸任以後を惟藤―惟任―惟基とし、大野郡大領である惟藤が配流されていた藤原伊周を厚遇し、出生した娘を惟任の妻として惟基が誕生した。万寿元年(一〇二四)生まれで元永元年(一一一八)没、九五才であった。と記されている。博多の大賀氏系図では万寿三年生まれで九三才没となっている。いずれも大和大神系図の諸任以降を補足した様式である。

しかし、いきなり神孫大神惟基に始る系図類にしても、著作者には惟基以前のことなどがどれくらい分かっていたのだろうか。大和大神の流れを隠し神武天皇や祖母嶽大明神を語り藤原氏に血縁を求める、そのような事情が何処にあったのであろうか。

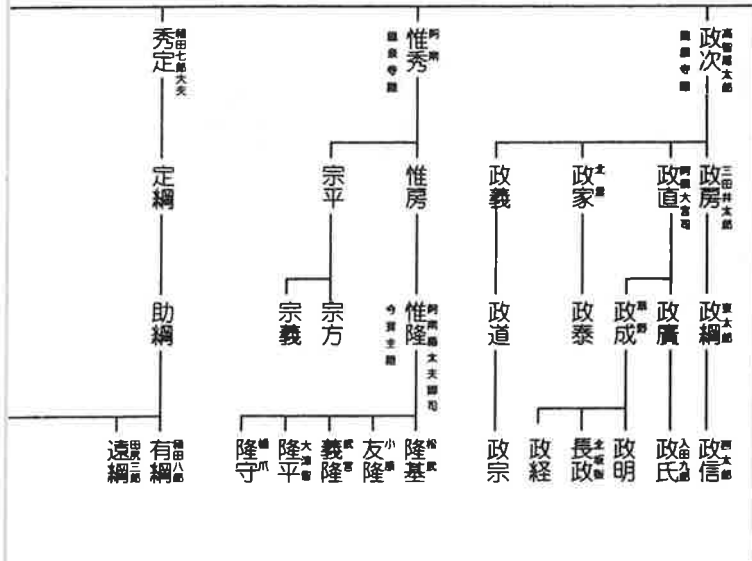
前号には佐伯氏が大夫氏に対抗するため室町時代に佐伯氏系図を粉飾したと書いたが、その原形は平安末期に作られたとしたい。緒方三郎惟栄の時代に源氏や平氏のように武門の棟梁として並び立とうとする気運があったとすれば、あるいはこの時期だったのかも知れない。

庶幾が土着した寛平四年(八九二)から惟栄が旗あげした養和元年(一一八一)まで二八九年が経過している。かりに庶幾から惟基までを五代、惟基から惟栄までを五

○祖母嶽大明神

則神武天皇也。此神化持男子云々。

惟基



代とすると、一代当りが三〇年となり長すぎるが末子相続説を採れば解決できる。これは早く生まれ成長した者から他所に自立して行き、最後に残った者が本家を継承する制度で、一族の領土は広がり一代の治世期間が長くなるので統率力も安定する訳である。

それにしても惟基の時代には緒方三六家と言われるように、大神一族は豊後に蔓延した状態を示している。これらの同族を結集すれば源平に劣らぬ軍団を組織することも不可能ではない。そのためには同族の系累を把握せねばならないし、軍団を編成するためにも系図は必要である。

まずは各流派の頭首から先祖書きを集めて編纂にかかると、彼らの始祖に当るのが惟基の男子五人とも九人とも言われる人物たちである。しかしその先は書けなかった。天皇家から出た源・平氏に比べて豊後国司大神良臣の身分も位も低過ぎ、素姓が知れてしまうからである。したがって神武天皇や祖母嶽大明神を語り神孫大神氏と称したのである。ゆえに神子惟基には初期五代の開拓時代の事跡が凝縮され豪傑のごとく表現されたのである。この系図がなければ、後に書かれた『平家物語』や『源平盛衰記』のネタにならなかつたであろうと推察した次第。(つづく)

